



事 故 と 原 因

— 小 考 —

まえ だ ゆたか
前 田 豊[†]

小咄に、橋の下に住んでいる宿無しの親子がお屋敷の火事を見て「われわれには燃える家がないから火事に遭う心配がなくて幸せだ」というものがある。

さて、災害が災害として発生するに至るまでには多くの条件が必要である。例えば、高速で走行している車がカーブを曲がりきれずに衝突をしたという交通事故の場合、単に速度が制限速度を超えていたという処理に終わることもあるかもしれないが、雨や雪のため路面が滑りやすかった可能性、タイヤが摩耗して滑りやすかった可能性、積み荷が多すぎて減速できなかった可能性、ブレーキパッドが摩耗して効かなかった可能性、横風にあおられた可能性、運転者が疲れていてハンドル操作が遅れた可能性、搭乗者がシートベルトをしていなかったため投げ出されて被災した可能性、などなど、多くのものが直接の原因として挙げられるのであろう（自動車事故防止の話ではないので、以上は単純化し適当に列挙したまでである）。

これとは別に、ではなぜ運転者がスピードを出していたのか、その背後にある真の原因を明らかにしなくてはならないということも言われる。例えば、スピードを出して走らないと会社のノルマを達成できないということがあったのかもしれない。また、運転者が疲れていたのは仕事に追われて休む暇がなかったためであったのかもしれない。また、本来は電車で行くところを車で行ったための事故であったかもしれない。

これら、多くの要因の重なるの結果、事故が起こり、たまたまそこに人が介在すれば人身“災害”となるものである。そこで、災害を防止するためには、このうちのいくつかの条件を取り外せば良い、という話は、昔から言われる「要因の連鎖」論であって、目新しいものではない。

要因の連鎖のうち、大もとの要因をつぶしてしまうのは有効である。災害“原因”を「それがなければ災害が起こらなかった要因」と考えれば、この連鎖して

いる要因のすべてがそれぞれ災害原因となり得る。

しかし、それであれば、そもそも自動車に乗っていないならば事故に遭っていないのだから、自動車の存在が災害原因（の一つ）であったとも言える。小咄の例で言えば、家を持つことが火事の原因である。突きつめれば、そもそも生きていることが死に至る原因であろう。だからといって、死なないようにはじめから生まれないというにはなるべきでないだろう。これら要因には除外すべきものと除外すべきでないものがある。

われわれは、日頃災害調査を行い、原因を追求するのであるが、そこで災害原因として考えるものは、つまりは「連鎖している要因のうち“取り除くことができる”要因」になっている。ときに、だれかが取り除いてくれないかという願望を込めて取り除くことはできないものを原因として挙げることもあるが。

さて、逆にいえば、「事故の原因は〇〇であるという」ことは、「事故を起こさないようにするためには〇〇を取り除くべきだ」という主張と同一のことを表している。一つの事故に対し、連鎖する要因は多くのものである。どれを除きどれを保存するかは、論理的必然ではなく、ある意味で主観によるのかもしれない。火事を防ぐために家を除くというのはいり得ないとも思えるが、破壊消防では実際に家が除かれていたのであるし、自動車事故を防ぐために自動車を除く（進入禁止）ことも日常である。

その意味で、見逃がされる背後要因、例えば仕事のノルマがきついため焦り、といったものが“真の”災害原因であって、それを明らかにしなくてはならないという主張は、つまりは背後要因（として挙げられるもの）を“取り除くべきである”，という主張になる。

しごくもつともではあるが、われわれ工学屋としては、摩擦係数がどうだとか衝撃エネルギーがどうだとか、そういう話だけで連鎖が断ち切られるほうがhappyである、と言ったら叱られるであろうか。

† (独) 労働安全衛生総合研究所：〒 204-0024 東京都清瀬市梅園 1-4-6